

【巻頭言】

呼吸をするようにアウトプットを習慣にする Publish Papers as a Habit, Just We are Breathing!

2006年に同志社大学総合政策科学研究科にソーシャル・イノベーションコースが設立され、そのメンバーが中心となり、日本ソーシャル・イノベーション学会は設立されました。2018年の設立準備大会を経て、2019年には第1回の年次大会が開催され、毎年大会が開催されています。2020年には学会誌「ソーシャル・イノベーション研究」が発刊されました。ここに第2号をお届けします。発行が遅くなりましたこととお詫び申し上げます。

創刊号は学会の理事による論文を中心とする構成でしたが、第2号は理事による論文、書評、そして会員による活動報告となっています。第2号の編集にあたり、編集委員会では今後の論文執筆・投稿に向けての準備の機会として、「論文執筆はじめワークショップ」を連続開催（2021年9～10月）ならびに個別相談を行いました。オンラインで実施したワークショップには39名の参加（9月23日には登録26名中21名、10月8日には登録21名中18名の参加）があり、個別相談は4名（10月16日、17日、30日、31日、各日1名ずつ）が受講しました。講師を務めた山口洋典先生は、日頃から「文章を書くことは呼吸と同じです。吸ったら吐きましょう。」とお話しされています。講座・個別相談の実施は結果として投稿数にはかならずしも結びつきませんでした。他の学会でも初学者会員を対象とした論文の書き方講座が開催されることが増えており、学会の役割の一つではないかと考えております。

第2号の概要を紹介いたします。研究論文は、青尾謙先生が「地域の歴史・文化に根差したソーシャル・イノベーションとは 岡山の歴史を事例として」と題し、SI地域エコシステムに着目し、ギデンズの構造化理論を分析枠組みとし、岡山のSI事例（閑谷学校と社倉法、大原家の社会事業と町並み保全、福武總一郎による島嶼部再生）を取り上げ、岡山のSI史を再構成するとともに、地域の歴史的・文化的コンテキストの影響を分析されたものです。新たなSIを生み出すソーシャル・イノベーターは、地域の歴史的・文化的コンテキストに加えて、更にそれを超えた外部の思想・理念・人物・資源等の新たなものを付け加え、それによってSI並びに外部者を含めた「地域SIエコシステム」

の成立が見られることなどが考察されています。

活動報告では中野陽子さんが、東アジア地球市民村2021で行った分科会「食べ物の現在と未来」の内容に関してご執筆いただきました。中野さんは長年、消費者の立場から食べものの生産過程を把握し、価格や品質について適正かどうかを考える力、「消費者リテラシーの向上」をテーマに研究を重ねてこられました。今回の分科会はオンラインにて開催され、日本と中国の約40名が参加しました。通訳を介した2時間半ほどの時間で、食の現在と未来について、国を超えて同じ場で思いを感じとり共有できたこと、日々の食卓の様子から食べものの現在について確認し、食の未来に思いをはせる、未来へ目を向けることができたことと報告されています。

書評では山口洋典先生が渥美公秀・稲場圭信編『助ける』（2019 大阪大学出版会）を取り上げています。同書は大阪大学人間科学部の教員らによる、人間科学部設立当時からある『人間科学とは何ですか？』という疑問への現時点における回答の一つとして刊行されている「シリーズ人間科学」の1冊です。「第1部「助ける」のフィロソフィーでは、助けること・助けないことについて哲学、人類学、宗教社会学からの議論を提供する。続いて第2部「助ける」のフィールドでは、差別、ジェンダー、国際協力など多様な場面での助ける行為の実際をフィールドワークから伝える。第3部「助ける」のサイエンスでは、助ける行為を、人々の安全行為、霊長類の助け合いなどの科学研究を通して分析した成果を紹介する。最後に、第4部「助ける」のアートでは、助け方の工夫について、カウンセリング、当事者研究、災害救援などの場面で行われている助け方の工夫を紹介し、「助ける」に関する実践的な展望を拓く」内容で、「全ての人を助けられなくても、誰かが助かる社会を創造すること、その意味を「助ける」ことの哲学に見出せるならば、それはソーシャル・イノベーションへの発露とも重なる」と評しています。

また、本書評でも紹介されている『ソーシャル・イノベーションの理論と実践（同志社大学人文科学研究所研究叢書）』（今里滋編、明石書

店)が2022年3月に出版されました。この書籍の執筆者は同志社大学総合政策科学研究科の修了生や現・元教員で、その多くが学会会員です。また、同志社大学政策学部の授業においても同名の講座が開設され、併せて大会への無料参加を奨励するなど、学部生へのソーシャル・イノベーションへの関心喚起に務めています。

2022年11月26～27日に開催された第4回大会では、31件の論文発表(1,000字程度の報告要旨に加えて5,000～10,000字程度の論文付き発表の研究・実践報告が13件、1,000字程度

の報告要旨のみで論文不要の研究・実践スライド発表が18件)が行われました。今後は大会と学会誌を連動させるなど、幅広く投稿を募る仕組みをつくるなど行い、投稿数を増やすとともに、理論的・実践的な議論が深められていくことを願っています。

<第2号編集・査読委員(○:編集長)>

大和田順子(同志社大学)巻頭言執筆

阿部直也(東京工業大学)

○山口洋典(立命館大学)